

「偽善に気をつけなさい」

2015年08月21日

ルカによる福音書 12章1節～3節。とかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間で耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる。」

主イエスはファリサイ派の人の食事に招かれた。その食卓で、ファリサイ派の人々と律法学者たちが築きあげてきた宗教性と姿勢がいかに欺瞞に満ちたものであるかを非難された。彼らは律法を守る自分たちを清く正しい者であるとし、守れない民衆を差別し、自らの権威に奢っていた。負い切れない律法の重荷を背負わされていた民衆は主イエスの言葉に賛意を示していたので、彼らは直接、主イエスに手をかけることはできなかった。しかし、激しく怒り、主イエスをやり込めようと敵意を燃やしていた。

主イエスを慕い、支持する民衆は足を踏み合うほどの群衆に膨れ上がっていた。その中で、主イエスはまず弟子たちに「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である」と言われた。パン種はパンを焼く時に、膨らせるために用いるイースト菌である。ファリサイ派の人々は見かけは立派に見えるが、偽善に膨らんだパン種である。これに気をつけなさいと注意された。聖書では、パン種は悪を増長する例えとして用いられている場合が多い。パン種の入ったふっくらしたパンの方が美味しいのではないかと思うが、膨れるパン種を悪の増長と例えたイスラエル人の見方には興味深いものがある。

出エジプトをした時、パン種の入っていないパンを持って出発した。平べったい「ナン」のようなパンであったらう。過越祭の時も、先祖の苦難を偲び、種入れぬパンを食べる慣わしであった。

主イエスはファリサイ派の偽善、外見よく、膨らんでいる悪に気をつけなさいと言った後、「覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない」と続けている。人の目を隠し、見えないようにしていても、現されないものはなく、隠れ知られないままで済むものはない。ファリサイ派の人々は偽善を隠し、清く正しい装いをしているが、彼らのふくらませた悪のパン種は必ず表に表れてくる。だから、暗闇で内密に語ったことは、明るみで聞かれ、奥の間で小声でささやいたことは、屋根の上で公衆に言い広められる。主イエスはファリサイ派の偽善は、どんなに隠そうとしても、公衆の面前で露わになると語られたのである。苦しむ民衆を顧みない彼らへの主イエスの怒りを理解することができる。

しかし、ひるがえって私たちの現実はどうであろうか。主イエスの怒りに溜飲を下げることで済まされないことがあろう。自分を正当化するために、隠し黙していることがあると認めない訳にはいかない。ファリサイ派の人々への言葉は私たち一人ひとりに語られたものである。人は皆、思い出すと死にたくなるような恥ずかしい体験を持っている。それでも「よし」としてくださる神の是認宣言が福音である。信仰は赦しがなければ生きられないことの告白である。主イエスの十字架は赦された者として共に生きる希望を約束し、それを可能にしてくださる。